



裏路地ラーメン

Yuki Kannagi

バイト募集

とある町の裏路地。ひっそりと佇む一軒のラーメン屋「真髓亭（しんずいてい）」名前を勘違いしている人が多いこのラーメン屋。最近バイトを募集しているようです。

ですが裏路地で募集をしても意味無いので人通りの多い場所に貼りだしをしたようです。それを今見ているのは、平凡な高校生だった。博多誠司、ラーメン好きな男の娘？ ではなく男の子。

勝手に貼り紙を外して地図の通りに歩いていきました。

「えっと、この辺かな？」

誠司は歩いていた、人通りも少なくなっていく裏路地を一人。昼間だと言うのにビルの陰となっていて暗い。

ジメジメと湿度も高く心地が悪い、誠司は心底こう思う。

「こんな所にラーメン屋なんか在るのかな……あったとしても、うえ」

誠司が汚いものを想像したのも無理は無い。なにせ人気が無くきのこが生えてきそうな、てゆうか生えている場所にあるラーメン屋なんてたかが知れているのだ。

「むう、さらに湿気と暑さが……この匂いは！」

誠司の特殊能力その一、彼はラーメン好きが高じて麺を茹でる匂いが分かるようになったのだ。

「あった。んーと……ま、ず、い、亭？」

「し・ん・ず・い亭だぞ」

「ひゃあ！ お化けー！」

「だーれがお化けじゃ、ボケって俺か。俺しかいねえもんな」

がはははと高笑いする男が誠司の前に現れた。真っ白いローブを纏っているのでお化けと言うのも分かる。

誠司はかなりビビりながら男に近づいていく。（注、この時点で誠司のある意味死亡フラグが確定します）

「あの一、貼り紙を見てきたんですけど……」

誠司が紙を持って見せると、真っ白なローブの中から意外とイケメンな男が現れた。

「お！ バイトか？ 身なりからすると高校生か？」

イケメンが台無しな高笑いを男は始める。しかし誠司はそれを他所に顔を俯ける。

「正確には高校生だった……ですよ」

その言葉に男が高笑いを止める。

「そうか、大変だったな。理由は聞かねえからよ、毎日来てくれないか？ 人手が足りなくなあ」

果たして人手が足りなくなるほど忙しいのかはさておきとして、元高校生美少年？（笑）と残念なイケメン店長という不可解で面白すぎるコンビが誕生した。

初日

誠司は早朝から裏路地を歩いていた。今日はバイトの初日、精が出るというものだ。

「おはようございまーす」

スライド式のドアを開けると、

「ZZZ……」

店長は白いローブ（昨日の）をかけて寝ていた。宙吊りでしかもハンモック。

「店長？ ……起一きーろー！」

「うわっはい！？」

拍子の抜けた声を出しながら店長は転落した、誠司はそれはそれは痛いものを見る目で見守った。

「イタタタ、お！ 新人おはよう！」

頭に出来た特大のたんこぶを押さえながら店長が起き上がる。

「おはよう！ ……じゃあないですよ、どうゆうことですか！」

「ん、何が？」

天然残念店長は事を理解していない。

「だって昨日、『仕込があるから5時に来い！』って……」

そんな誠司の心からの叫びを店長は軽くあしらう。

「ああ、AMじゃあなくてPMだ」

「ガッデム！」

誠司の一方的な勘違いではあったが店長にも落ち度はあった、が反省はしているらしく。

「すまなかったな」

「まったくですよ」

誠司は呆れたように腕を組む。お前も悪いんだぞ～。

「まっ、ちょうど良いだろ？」

「えっと、何が？」

「さあ、仕込みをはじめるぜー！」

「え～！？」

本当に反省はしているのです。……多分。

何でもアリの自己中店長、それでも誠司自身そんなに悪くは感じていなかった。

「そういえば店長」

誠司が仕込みの手伝いをしながらイケメンの男に話しかけた。

「どうした？ 新人」

男は見た目に反した言葉で返した。それを確認した誠司は仕込みよりのなべを取り出しながら

「この店って……お客さん居ないですよね？」

禁忌の言葉を口にした。

それは昨日のこと、誠司が例の如く裏路地を歩いていると一人の男性に出会った。黒いビジネススーツを着た言わばサラリーマンといったところの人物に。

「君、真髓亭の新人さん？」

やさしそうな口調で誠司に話しかけてきた「はい」と、誠司が返すと、

「あの店はお客さんがいないからねー。まあ、頑張ってるね」

「は、はあ……」

「ということがあって」

話を聞いた店長は徐に、

「誠司、今日は何曜日だ？」

ボケたのかそうではないのかは分からなかったが顔がマジであったのは確かだった。

「今日は、金曜日ですよ。もうすぐ六時ですね」

そう答えると店長が誠司の傍によって行って、

「もうちょい待ってな、すぐ来る」

そう言って厨房の奥へと入っていった、誠司もまた頭にハテナを浮かべながら蛇口をひねった

「どうもー」

一人の男性が店に入ってきた、誠司が昨日あった男性だ。

「いらっしゃい、田中さん」

奥から店長が顔を覗かせた、誠司は思わぬ再会に目を丸くしている。

「昨日のサラリーマンの方じゃないですか」

誠司が問うと、田中という人が誠司に気がついた。

「おや、昨日の新人さん。こんばんは」

「こんばんは、じゃないですよ。……お客さんでしたか」

誠司が驚きを隠せないでいると「ごめんね」と田中さんが返した。

「いやあ、店長にはお世話になっているからね。それで僕は常連さんって訳」

「そうなら言ってくださいよ、昨日も営業していたんですよ」

田中は行きたいのは山々といった表情を見せた、店長は勝手にラーメンを作り始めている。

「ちょっと色々あってね、僕は週末にしか来れないのよ。美味しいのにね」

「あ、美味しかったんですね。ここ」

誠司が素直な感想を述べると、

「失礼な奴だな」

ポケッと良い音を立てて店長が誠司の頭を叩いた。

「だってそう評価するしかないでしょう、裏路地でお客さんも無しに来る人は変態くらい……」

「目の前に居るけどね、変態が」

誠司ははっとして平身低頭をする。田中は「良いよ」と手を横に振った。

「僕だってその辺りは自負しているよ、おかしな人ってこと位は」

「お前は昔からそうだな」

店長と田中が笑い始める、誠司もつられて笑い出す。

@HOME in my place 暖かい場所は此処、楽しい場所もここ

ネタ切れ1

「なあ、誠司」

店長がおもむろに話しかけてきた、僕はそれに応える。

「何ですか？ 店長」

「実はな、この真髓亭を世に広めるって言うやつが居てな」

「そうなんですか？」

初耳だった、そもそも場所を特定できないようにしているのは店長なんじゃ、とも思う。

「そいつがこの間の地震で頭がイカれてしまって、ネタ切れになったそうだ」

「……それで？ 報告書なら毎週、日曜に送っているはずですけど」

「それがどうも届かないらしくてな、バカだろ？」

そもそも人に頼っている時点でダメだと思うのは僕だけか？

「ん、なんか言ったか？」

「い、いえ何も」

「まあいい、それでどうも俺らのことを想像と妄想で書くらしい」

「良いんじゃないですか？ 別に」

大体、話題が無いのに創ってもらってるしなあ。

「本当か？ お前がホモっていう設定みたいだぞ？」

「うそおおおおおおおおお！」

「忌々しき事態だろ？ 俺もイヤだ（クワッ）」

おい三流作者！ 出て来い、殺してやる！

「その意気だ！ やっちまえ！」

――店長お得意の冗談にまんまと引っかかったのであった。

ネタ切れ2

結局の所、前回のネタ切れ騒動は半分本当だったらしく、後々店に電話がかかってきた。その内容が……

——Truuuuuuuuuuuuuu。

「もしもし、真髓亭です」

「もしもし、yukiです」

相手はもちろん真髓亭を短編小説集としてまとめてくれている、yukiさんだ。

「あ、いつもありがとうございます」

「いえいえ、こんな三流作家にチャンスを与えてくれたこと。本当に感謝しています」

声を聞くのは初めてだったが、男の人らしい。

「それで、報告書。遅れて届いたので、妄想で書く必要がなくなりました」

素晴らしい！ ワンダホー！ エキサイティン！

「あの……頭大丈夫ですか？」

「はい！ ぜんぜん問題ありまくりです！」

その後、電話越しに「末期のようだ」とか聞こえたけど関係ない。

「……ええっと、とりあえず早とちりのお詫びと報告をしたかっただけなので。マスターにもよろしくお願いします」

「はい、分かりました」

そこで、電話が切れる。

「いいやったああああああ！！」

あまりに嬉しくて一人で歓喜に満ち溢れる。（店長は寝ている）

そんなわけで、また僕たちの生活が綴られていくわけですね。

また、お付き合いください！